

編輯後記

○曆はこの十九日から長月に入ります。時雨初霜、柿紅葉、木枯、十夜——晩秋、初冬の風物が次ぎ／＼に私達を迎へてくれます。一トひらの落葉にも悠久な藝術味を感じます。

○「文藝」十一月號に發表された眞船豊氏の「山參道」は滋味のある作品で、早速新生新派が舞臺に上せましたが、舞臺から受ける感じと、原作を讀んだ時の感じとは大分に違ひます。作者が謂ふ所の「喜劇」と役者達の解釋してゐる「喜劇」とが違つてゐるかのやうにであります。

○七、八、九の三日間を朝日會館に公演した文學座の「砂の上」も好い物でした。本誌前號に執筆された坂本猿冠者氏も出演されて眞面目な淡々たる藝風を示されました。役柄と觀やうによつては主人公以上の陰影を持つものであります。

○文樂の十一月は阿波の鳴戸だの壺坂だのと女義大夫の出し物のやうな中に、「日本賢女鑑」は「衆仙人吉野花玉」と共に珍らし

いものでせうが、作の價値はどんなものでせうか、古靱大夫の眞價を發揮するに足るものではないのではないでせうか。歌舞伎の方はといへば、更に感興も呼ばぬ狂言ばかりが並べられてゐます。藝術の實りの秋でなくて、凋落の秋のやうな感じがします。文樂も歌舞伎もこんな事では困ります。

○古靱大夫は明新春からいよいよ櫓下と決定したが、紋下としての眞價を世に示すやうな語り物の精選が肝要である。大夫にも抱負はあらう。その抱負を實施するの時は正に至つたのである。

○本誌同人山本修二先生の著「演劇と文化」は好評。成瀬無極博士は再選せられて文學部長の榮位を重ねられた。林秀雄は讀賣新聞からの依頼で、大阪三座の劇評を執筆した。

○「近世淨曲巨匠私見」を二回發表された辻部圓三郎氏の急逝はまことに残念である。氏もこの稿が未完成に終つたことは、何程か遺憾であらうと哀惜に堪へない。

編輯部 林 秀雄
大西 重孝
森 ほのほ

淨瑠璃雜誌 昭和十六年十一月號

(第四百四號) (毎月一回發行)

●定本 一部 金五十錢
●定本 半ケ年 金三十圓
●定本 十二冊 金五圓

○御注文は一切前金の事
○雜誌發送を以て領收證に代ゆ
○外國送りは一冊に付郵税十錢を要す
○振替は浪花名物淨瑠璃雜誌社。
○座大阪二九二八番

廣告料

普通 一行 金三十圓
一等 一行 金二十圓
二等 一行 金二十圓
三等 一行 金三十圓

○特等は一頁以下の需に應ぜず六回以上の特約には割引す
○製版を要する時は其實費を申受く
○廣告料は總て前金の事
○一行九ポイント活字

發行兼 樋口 虎之助
編輯人 坂口 秀吉

印刷所 高尾印刷所
大阪市西區江戶堀下通四ノ三〇
大阪市西區江戶堀下通四ノ三〇